

画期としての2008年マレーシア総選挙 ——公開フォーラム「民族の政治」は終わったのかから——

西 芳実

東南アジア諸国の政治を語る際の問題に、強権的・金権的・抑圧的とみえる側面をもちつつ、在地社会の人々にそれなりの意義をもつようにみえる政治体制をどう語るかという問題がある。普遍的な基準を持ち出してネガティブに評価することはたやすいが、それでは人々が生きている現実を十分にくみとれない。開発独裁という用語を避けて開発主義体制や政府党体制という言い方がつくられたのもこの点から理解できる。

冷戦終結やアジア通貨危機を経て、各国の政治体制の質のよしあし——民主化の度合いや行政の透明性など——に対する国際社会の関心は高く、各国政府はもとより、研究者も、人権の保障や法の支配、住民参加といった点に注意を払うことが求められている。ここから、たとえば1998年5月政変以降のインドネシアは、30年以上に及んだスハルト体制の諸問題を構造的に改革しようとする動きと、これに逆行する諸現象——地方ボスの台頭や汚職の横行——というかたちで語られることになる。

こうしたなかで、JAMS 連携研究会である関西マレー世界研究会が「民族の政治」を切り口にして2008年3月の第12回マレーシア総選挙の結果からマレーシア政治について考える公開フォーラムを開催したことは、重要な意味を持っているように思われる。

2008年3月の総選挙は、1970年代以来長期政権を維持してきた与党連合の国民戦線(BN)の議席が大きく後退する結果となり、内外の人々を驚かせた。アジア通貨危機で経済危機やレフォルマシ運動に代表される強い政権批判に直面

するもこれを乗り越え、20年以上首相を務めたマハティールからアブドゥラへの政権移行も2003年に完了し、2004年総選挙で安定した議席を確保していたBNの歴史的「大敗」をどのように理解すればよいか。

総選挙から間もない2008年5月4～5日に京都大学で「民族の政治」は終わったのか——2008年マレーシア総選挙の現地報告と分析」と題して開催された公開フォーラムは、こうしたマレーシア政治への関心の高まりを背景に、大型連休中であるにもかかわらず全国から50名前後を集め、インドネシアやタイ、フィリピンなど他地域を専門とする研究者も参加して活発に議論が展開された。

フォーラムは4つのセッション(1. BN体制の変容? : マクロ政治からの視座、2. BN体制への対応(1): 民族別の改革の試み、3. BN体制への対応(2): 民族間関係の再編の試み、4. 地方の論理をどう読み解くか)に分けられて11の報告から構成され、BNが票を失ったことの意味や背景がさまざまな角度から検討された。報告と議論はJAMSディスカッションペーパーにまとめられ、ウェブ上で公開されている(<http://jams92.org/jamswp.html>)ので、詳しくはそちらを参照されたい。

現代マレーシア政治を研究する研究者が参集した本フォーラムは、2日間にわたる密度の濃い議論を通じて、それぞれの報告者が自身の専門性に照らし合わせて分析結果を披露するにとどまらず、以下に見るようなマレーシア政治を理解する枠組みやマレーシア政治の今後を考えるた

めの注目点が共有されたことが最大の成果といえるだろう。

第一に、マレーシア政治を理解する枠組みとしての「民族の政治」という考え方である。「民族の政治」というと人々の投票行動を民族的属性から説明するものと誤解されがちだが、マレーシアの BN 体制に体现された「民族の政治」は、社会を複数の民族に分節化し、民族内の問題は民族内での解消を求めて相互に干渉せず、民族間関係や全体に関わる事柄についてはそれぞれの民族の代表が協議して決めるというあり方である。したがって BN が票を失ったことは、民族ごとに社会を分節化する体制に対する異議申し立てなのか、分節化そのものではなくマレー人、華人、インド人といった区切り方に対する異議申し立てなのか、あるいは分節化を積極的に受け入れたうえでそれぞれの民族の中で誰が代表になるかをめぐら問題なのかといったさまざまな可能性から検討する必要がある。各政党の主要な支持基盤が誰かということと、各政党が誰を代表する政党と自認しているかを慎重に区別することが重要なのはこのためであり、巻末の政党一覧にもこうした考え方が反映されている。

第二に、マレーシアの中でもサバ・サラワクを理解することの重要性である。従来マレーシア政治は、半島部を中心にマレー人、華人、インド人の 3 民族の枠組みからもっぱら語られてきた。これに対し、サバとサラワクはそれぞれ上述の 3 民族と並ぶ独自の政治経済的ブロックを成しており、マレーシア政治はマレー人、華人、インド人、サバ、サラワクの 5 つのブロックからそれぞれ検討すべきであることが確認された。そのうえで、サバとサラワクでは連邦与党との連合が重視されているため、半島部で与党連合 BN と野党連合 PR の勢力バランスが変わればサバとサラワクの BN

加盟政党は PR に移籍する可能性が高いことが指摘され、サバ・サラワクの政治に対する理解なくして今後のマレーシア政治の展開は理解できないとの認識が共有された。

第三に、今後のマレーシア研究の課題である。「民族の政治」のゆくえを展望するには、5 つのブロックの 1 つを構成するインド人の政治行動や、政党にかわって社会的サービスを提供する役割を担い始めた NGO の動きに対する理解が欠かせないが、本フォーラムではこれについての報告は限られており、今後の研究の進展が期待される。また、議論が深まる中で、研究者間で基本的な用語(役職名や団体名)の訳語が統一されていないとの問題も指摘された。JAMS などの活動を通じてマレーシア研究の裾野が広がる中で、統一した訳語の指針の作成なども今後の課題といえるだろう。

全体を通じて印象的だったのは、参加した報告者がマレーシア政治のあり方に積極的な意味を見出そうとする姿勢である。報告者の 1 人が述べていたように、これまでマレーシア社会はしばしば複数の民族に分断された未熟な社会と位置づけられたり、強権的・金権的要素があるから選挙分析はなじまないと言われてきた。それに対し、本フォーラムの報告者らは、マレーシア社会が定められた法律や制度に基づいて合法的な手続きを重視している側面や、国軍が政権交代に関与していない側面などを評価し、「金で票を買収する」「メディアに対する抑圧」といったアジア政治の語り口としてなじみのある言い回しに安住しないよう努めている様子が垣間見えた。そうした努力の中からマレーシア政治を理解する枠組みとして「民族の政治」という考え方が提示され、参加者が自らの議論に積極的にとりこもったことの意味は大きいように思う。